



後鳥羽院

丸谷才一

筑摩書房



丸谷才一（まるや・さいいち）

作家・批評家。大正十四年山形生。東京

大学英文科卒。著書「艇まくら」「たっ

た一人の反乱」「梨のつとて」他。

日本詩人選 10 後鳥羽院

昭和四十八年六月十日第一刷発行

昭和五十四年二月二十日第七刷発行

著 者 丸 谷 才 一

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京二九一―七六五一（営業）

東京二九四―六七一一（編集）

振替東京六十四二二三 郵便番号一〇一九一

印刷 明和印刷 製本 鈴木製本

© 一九五五 丸谷才一

〔分類〕 1392（製品） 13210（出版社） 4604

目次

歌人としての後鳥羽院

雑歌

春歌

夏歌

秋歌

冬歌

哀傷歌

羈旅歌

恋歌

へにける年

宮廷文化と政治と文学

五

五

三

充

四

二〇

三

二

五

一七

二九

あとがき

後鳥羽院年譜 岡野弘彦編

後鳥羽院和歌索引

二九三

二九

後鳥羽院

歌人としての後鳥羽院

天皇甚好和歌。師五条三位俊成。其堪能独歩於百世。
和歌之道大興于此。

『二十一代集才子伝』

人もをし人もうらめしあぢきなく世をおもふ故に
もの思ふ身は

『後鳥羽院御集』建暦二年十二月二十首御会。また、『続後撰和歌集』卷第十七雑歌中。
『後鳥羽院御集』など誰も読まない。『続後撰和歌集』にいたってはさらに読まれな
いと言つてよからう。それにもかかわらずこの後鳥羽院の歌がすこぶる人口に膾炙し、
「ほのぼのと春こそ空にきにけらし天のかぐ山霞たなびく」よりも、「見渡せば山もと霞
むみなせ川ゆふべは秋と何思ひけむ」よりも、さらに「我こそは新じま守よ沖の海
のあらし浪かぜ心してふけ」よりもよく知られているのは、ひとえに『小倉百人一首』
の力である。すなわち藤原定家は後鳥

羽院の最高の作品としてこの一首を選んだわけだ。あるいはすくなくとも、上皇の歌としてはこの一首を選ぶようにと、息子の為家に言い残したわけだ。

実を言うとかつてわたしはこのことに不審をいだいていた。定家が誰よりも恐れていたらしい当代の上手の、全作品を代表させるに足る歌とは思えなかったからである。もちろん『小倉百人一首』が定家の撰であることを疑い、室町以降の定家崇拜にあやかっででっちあげた伝説にすぎないとしりぞけるならば話は別だろう。しかしわたしは、いわゆる実證的研究の成果よりは長い歳月にわたる伝承のほうを重んずるし、それにどうやら最近は、この伝承のかなりずしも迷妄ではないという学説がかなり有力なように見受けられる。これは、たとえ百歩ゆづつても、定家の意向が隅々まで反映していたと見るのが無難だろう。大部分は彼の手によって編まれたものを、ほんの一部分、後人の恣意によって手直しするという事態は、当時の定家の名声から見てどうもあり得ないことのような気がする。すなわち、定家はやはりこの一首を後鳥羽院の代表作と見なしたのであろう。

T・S・エリオットの名台詞めいせりふをもじって言えば、定家と意見を異にすることは危険である。それはおそらく、ジョンソン博士と意見が分れることよりもっとあやういはずで、よほど覚悟を決めた上のことでなければならぬ。だが困ったことに、一応そうは認めながらもわたしは相変らずこの歌に感心しなかったのである。

そのころのわたしの解釈は、至ってありきたりの単純なものであった。一体この歌の語句で問題なのは「をし」と「あぢきなく」くらいのもので、それとても前者は『大言海』に従って「愛^メヅベシ。イツクシ。ヲカシ」と受取り、後者もまた同じ辞書の言う「快カラズ思フ。ツラシ。ナサケナシ。無^レ情」と見ればそれですむだろう。もともと難解では決してない歌なのである。しかしわたしがありきたりの解釈と言ったのはそういう語釈の問題ではなく、いわば討幕の決意を秘めた政治的な歌として見ていたという事情にほかならない。国歌大系本の『続後撰和歌集』には、「人もをし人もうらめし」の注として、「前の人は忠良の臣を指し、後の人は鎌倉幕府の専横者を指す」とあるが、わたしも大体こういう具合に考えて内容の浅さをさげすんでいたらしい。そして、敢えて言い添えておくならば、普通はおおむねそういう性格の歌として受取られているのではないかと思う。

ところがわたしの考えは、江戸末期の国学者、岡本況齋の『百首要解』によって打ち砕かれたのである。況齋は言う。

『源氏』須磨、「かかる折は人わろく、うらめしき人多く、世の中はあぢきなきものかな、とのみ、よろづにつけて思^{おも}す」とあるを用ひさせ給ひて一首となさせ給ひしなるべし。あぢきなく。心にかなはでせんすべなきをあぢきなしといへり。俗ににがにがしといふに似たり

と県居翁いはれき。をしは愛の字をよめり。一首の意。せんすべきなき世を思しつづけ給ふにつきては、おんみづからの行く末いかがあらんと、よろづ御こころまかせ給はぬままになつかしく思す人もあり又うらめしく思す人もあり、と也。

こうなれば話は違つてきて、たちまち『源氏物語』の地平が開けるわけである。『吾妻鑑』の陰鬱な日常のかわりに『源氏物語絵巻』の華麗な幻があらわれると言うほうがもっと具體的かもしれない。とにかく後鳥羽院はこのときみずからを光源氏になぞらえていた。水無瀬の離宮はまだ造営されていなかったけれども、水無瀬殿と須磨とを二重写しにすれば、そういう後鳥羽院の心意気は最も鮮かにとらえられるであらう。おそらく定家がこの歌を『小倉百人一首』に撰抄した動機としては、このような前代への思慕を喜ぶ気持が強く働いていたにちがいない。王朝の古典趣味ないし古典主義によって歌の奥行を増すことは、彼の歌学の基本だったからである。あるいは、文学の伝統を重んじることこそ彼の文学の核心にほかならないからである。そして王朝の風情をなつかしむ心でもう一押し押せば、幕末の国学者の言う「なつかしく思す人」とはすなわち寵妃、寵童であり、「うらめしく思す人」とは意に従わなかった女たち、少年たちということになるだろうか。「世」にはまた「男女の仲」という意もあるからだ。けれども光源氏の場合にも後鳥羽院の場合にも、もちろん恋愛だけに話を限ってはいけな

だろう。彼らにはいずれも政治生活があったからである。と考えれば、ここの「世」には二重の意味が仕掛けられていることになるし、一首全体が恋の哀れと政治の悲しみとの双方を詠んだ、こみいった細工の歌となってあらわれるように思われる。

そしておそらく定家の鑑賞の勘どころは、そのような複雑で新鮮な味わいにあったにちがいない。これこそは在来のどの歌人も狙わなかった新境地だと、彼は好敵手の技倆に感嘆したに相違ないのである。もっとも、晩年の定家がこの一首に注目することができたのは、後鳥羽院の後半生の悲劇があったせいだけでも。それはひよっとすると、恋の嘆きの歌がやがて訪れる政治的な悲しみを予感していたという趣であったかもしれない。

それに、こういう経緯も考えられる。定家が鎌倉幕府に気兼ねして『新勅撰集』に後鳥羽院の歌を一首も撰入しなかったのは有名な話だが、彼はおそらくそのことをはなはだしく気に病んでいた。それゆえ『小倉百人一首』のときには口なおしのため、そして関東への面あてのため、わざとこういう政治的と言えぬこともない歌を採り、しかも世間に対してはこの一首の別の側面である恋の歌という性格を指さして平然としていたのではないだろうか。

後の世がこういう入り組んだ歌の詠み方を忘れたという事情についてはここでは述べない。

後鳥羽院の歌のうち特に気に入ったものを取上げてあれこれと記すに当っては、『新古今和歌集』の部立どおり、四季、賀、哀傷、離別、羈旅、恋、雑、神祇、釈教の順でゆくのが正しいとは思っていたが、それなのにこの歌のことからはじめてしまったのは、やはり藤原定家のゆかりのゆえであろう。こうなれば仕方がないから、ひとわたり雑歌をつづけ、あとは『新古今』の順序に従うことにする。

我こそは新じま守よ沖の海のあらし浪かせ心して
ふけ

『後鳥羽院御百首』雑。また、『増鏡』巻第二新島守。また、『承久記』下巻。

「沖」が「隠岐」にかけてあることは言うまでもない。『後鳥羽院御百首』は、承久の事に敗れ、この島に流されてからのものだからである。前後十九年にわたる流竄りゅうざんの生活において、歌はこの帝のただ一つの慰めぐさであった。そして囚人である天子の詠のうち最も高名なものをもってこの一首とする。『増鏡』の手柄と言うべきであろうか。この歴史物語では、

このおはします所は、人離れ里遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入て、山かげにかたそへて、大きやかなる巖いはほのそばだてるをたよりにて、松の柱に葦ふける廊など、気色ばかり事そぎたり。まことに、「しばの庵いはりのただしばし」と、かりそめに見えたる御やどりなれど、さるかたになまめかしくゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀬みなせ殿おぼし出づるも夢のやうになん。はるばると見やらるる海の眺望、二千里の外も残りなき心地する、いまさらめきたり。潮風のいとこちたく吹来るをきこしめして、

とあつて、この歌とそれから、

おなじ世に又すみの江の月や見んけふこそよそに
隠岐の島もり

が引かれるのだが、ただしわれわれはこの抒情的な文脈のせいで、久しいあいだ一首を誤解していたように思われる。これは無理もない話で、前には『源氏』須磨にあやかった美文が置かれ、後ろには住吉の月にあこがれる嘆きの歌が控えていれば、どうしても、「自分こそはこの

隠岐の島の新任の島司だ。だから、隠岐の海の激しい波風よ、この新参の島守をいたわって、注意して吹いてくれ」というような解釈に陥りがちになる。そして、さかのぼって言えば『増鏡』の著者もまたほぼこのように一首を解していたから、この形で引用をおこなったわけである。

ところがここに『後鳥羽院御百首』に附した古注（文体から推して室町期のものと目される）があつて、わたしに言わせれば一首はそう読むのが正しい。いわく。

われこそはと云ふ肝要なり。家隆卿隠岐国へ参り、十日ばかりありて帰らんとし給ふに、海風吹き帰りがたければ、我こそ新じま守となりて有れ共、など科なき家隆を波風心して都へかへされぬとあそばしける。されば俄に風しづまりて家隆卿都へ帰られしとなり。

ただし、藤原家隆が藤原定家と対照的なくらい、承久の乱以後も後鳥羽院に盡したことは事実だけれど、実を言えば彼は隠岐へは一度も行っていない。当時の旅の難儀と家隆の老齢を思えば、ただちに納得のゆくことである。つまりこの注釈の伝える挿話は後人の虚構に属するので、室町のころには和歌の功德をたたえる説話がむやみにはやっていた。

しかしわたしの言いたいのは、後鳥羽院が沖の海の浪風に「我こそは」と呼びかけるとき、

それはみじめな流人として、しかも自分のため、哀願しているのでは決してなく、この島を守る者として、誰か他人のため、海に命令しているのだということである。その誰かとは荒天のため舟を出せずに当惑している漁師であると考えてもいいわけで、「新じま守」という言葉には、案外、つい先日まで支配していた日本の国全体の広さにくらべれば、こんな小島を司るくらいすこぶる易しいという自負がこめられているかもしれない。どうやら新任の島守は、今までの者とは格段に違う手ごわい相手だよと海をおどしているように見受けられる。『万葉集』巻第七、読人しらずに「今年ゆく新島守が麻ごろも肩の紙まよりは誰か取り見む」とあるのは新たに徴発された防人さきもりのことだろうが、ここでは防人どころではない遙かに高貴な者の謂としてこの言葉が使われているようだ。

そう考えるに当ってはいささか根拠があるので、「島守」は今日、単に「島ヲ守ル者。島人シマビト」(『大言海』)と取られているけれども、遠い昔には「島の神」の意であった。

神をひめ、もり、などいふこと常のことなり。さほ姫、たつた姫、山姫、しまもり、これらみなかみなり。(顯昭『袖中抄』)

さらに「橋姫」や「橋守」を例として加えれば、この説はいよいよ納得のゆくものになるは

ずだが、おそらく後鳥羽院にはこういう語感が生きていたろうし、それに、呪術者としての帝王という古代的な心理はかなり名残りをとどめていて、両者は容易に結びついたにちがいない。すなわち「新じま守」とは着任したばかりの島の神、一首はその勇壮な神が風濤に発した号令となるであろう。

興味ふかいことには、同じ『袖中抄』によれば、隠岐の島には彼以前に古い島守、本来の島の神がいた。顕昭は、紀貫之の「わたつみのちぶりの神にたむけする幣ぬさの追風やまずふかなん」ほか一首を引いて、道触神ちのりのかみ（海陸の旅の神）について考證している箇所で、

隠岐国にこそ知夫利島といふところにわたすのみやといふ神はおはすなれ。舟いたすとはその神に奉幣してわたるを祈るとぞ申す。

と述べているのである。とすれば、後鳥羽院は自分をもう一人のわたすの宮に見立て、いや、この在来^{（しん）}の神が無力なので今度は自分が神として乗込んで来たなどと興じていたのかもしれない。これは上皇の氣象としては充分あり得ることだろうし、すくなくともその種の見立てやおどけは「我こそは」という強く張った出だしにふさわしいものであった。われわれは、『増鏡』の単純な泪にまどわされて第一句の複雑なユーモアを見落してはならないだろう。配所に生き